

# 牛をつないだ椿の木

新美 南吉  
にい み なん きち

—

山の中の道のかたわらに、椿つばきの若木わかぎがありました。

牛ひきの利助りすけさんは、それに牛をつなぎました。

人力ひきの海蔵かいぞうさんも、椿の根本じんりきじやへ人力車をおきました。人力車は牛ではないから、つないでおかなくてもよかったです。

そこで、利助さんと海蔵さんは、水をのみに山の中にはいってゆきました。道から一町ばかり山にわけいったところに、清くてつめたい清水がいつもわいていたのであります。

ふたりはかわりばんこに、泉いずみのふちの、しだやぜんまいの上に両手をつき、腹はらばいになり、つめたい水のおいをかぎながら、鹿しかのように水をのみました。はらの中が、ごぼごぼいうほどのみました。

山の中では、もう春蝉はるせみが鳴いていました。

「ああ、あれがもう鳴き出したな。あれをきくと暑くなるて」

と、海蔵さんが、まんじゅう笠がさをかぶりながらいきました。

「これからまたこの清水を、ゆききのたんびに飲ませてもらうことだて」

と、利助さんは、水をのんで汗あせが出たので、手ぬぐいでふきふきいきました。

「もうちと、道に近いとええがのオ」

と海蔵さんがいいました。

「まったくだて」

と、利助さんが答えました。この水をのんだあとでは、だれでもそんなことをあいさつのようにいいあうのがつねでした。

ふたりが椿のところへもどって来ると、そこに自転車をとめて、ひとりの男の人が立っていました。そのころは自転車が日本にはいつてきたばかりのじぶんいなかで、自転車をもっている人は、田舎では旦那衆だんなしゅうにきまっています。

「だれだろう」

と、利助さんが、おどおどしていいました。

「区長さんかも知れん」

と、海蔵さんがいいました。そばにきてみると、それはこの付近の土地を持っている、町の年とった地主じぬしであることがわかりました。そして、も一つわかったことは、地主がかんかんにおこっていることでした。

「やいやい、この牛はだれの牛だ」

と、地主はふたたりをみると、どなりつけました。その牛は利助さんの牛でありました。

「わしの牛だのイ」

「てめえの牛？これをみよ。椿の葉をみんなくってすっぱり坊主ぼうずにしてしまったに」

ふたりが、牛をつないだ椿の木をみると、それは自転車をもった地主がいったとおりでありました。若い椿わかの、柔らかい葉はすっかりむしりとられて、みすばらしい杖つえのようなものが立っていただけでした。

利助さんは、とんだことになったと思って、顔をまっかにしながら、あわてて木から綱つなをときました。そして申しわけに、牛の首ったまを、手綱たづなでぴしりと打ちました。

しかし、そんなことぐらいでは、地主はゆるしてくれませんでした。地主はおとなの利助さんを、まるで子どもをしかるように、さんざんしっかりとばしました。

そして自転車のサドルをパンパンたたきながら、こう  
いいました。

「さあ、なんでもかんでも、もとのように葉をつけし  
めせ」

これは無理なことでありました。そこで人力ひきの  
海蔵さんも、まんじゅうがき笥をぬいで、利助さんのため  
にあやまってやりました。

「まあまあ、こんどだけはかにしてやっつくんやす。  
利助さんも、まさか牛が椿をくってしまつとは知らずに  
つないだことだで」

そこでようやく地主は、はらのむしがおさまりました。  
けれど、あんまりどなりちらしたので、体からだがふ  
るるとみえて、二三べん自転車のりそこね、それ  
からうまくのって、いってしまいました。

利助さんと海蔵さんは、村の方へ歩きだしました。  
けれどももう話をしませんでした。おとながおとなにし  
かりとばされるというのは、情ないことだろうと、人

力ひきの海蔵さんは、利助さんの気持ちをくんでやり  
ました。

「もうちつと、あの清水が道に近いとええだがのオ  
と、とうとう海蔵さんがいいました。

「まったくだて」  
と、利助さんが答えました。

## 二

海蔵さんが人力ひきのたまり場へくると、井戸掘り  
の新五郎しんごろうさんがいました。人力ひきのたまり場といっ  
ても、村の街道かいどうにそつた駄菓子屋だがしやのことでありました。  
そこで井戸掘りの新五郎さんは、油菓子あぶりがしをかじりな  
がら、つまらぬ話を大きな声でしていました。井戸の  
底から、外にいる人にむかって話をするために、井戸  
新さんの声が大きくなってしまったのであります。

「井戸ってもなア、いったいいくらでほれるもんかい、井戸新さ」

と、海蔵さんは、じぶんも駄菓子箱から油菓子を一本つまみだしながらききました。

井戸新さんは、人足ひとぞくがいくらいくら、井戸囲いどがこいの土管どかんがいくらいくら、土管のつぎめをうめるセメントがいくらと、こまかく説明して、

「まず、ふつうの井戸なら、三十円もあればできるな」と、いいました。

「ほ才、三十円な」

と、海蔵さんは、眼めをまるくしました。それからしばらく、油菓子をぼりぼりかじっていました。が、「しんたのむねを下りたところにほったら、水が出るだろうかなア」

と、ききました。それは利助さんが牛をつないだ椿の木のあたりのことでありました。

「うん、あそこなら、出ようて、前の山で清水がわくくらいだから、あの下なら水は出ようが、あんなところへ井戸をほって何にするや」

と、井戸新さんがききました。

「うん、ちっとわけがあるだて」

と、答えたきり、海蔵さんはそのわけをいいませんでした。

海蔵さんは、からの人力車をひきながら家に帰ってゆくとき、

「三十円な。……三十円か」

と、何度もつぶやいたのでありました。

海蔵さんは敷やぶをうしろにした小さい藁屋わらやに、年とつたお母さんとふたりきりで住んでいました。ふたりは百姓ひゃくしょうじごと仕事をし、ひまなときには海蔵さんが、人力車をひきに出いたのであります。

夕飯ゆいばんのときにふたりは、その日にあつたことを話しあうのが、たのしみでありました。年とつたお母さん

は隣りの鶏が今日はじめて卵をうんだが、それは  
おかしいくらい小さかったこと、背戸の柵の木に蜂  
が巣をかけるつもりか、昨日も今日も様子をみにきた  
が、あんなところに蜂の巣をかけられては、味噌部屋  
へ味噌をとりによくときにあぶなくてしようがない  
ということ話をしました。

海蔵さんは、水のみについているあいだに利助さ  
んの牛が椿の葉をくってしまったことを話して、

「あそこの道ばたに井戸があったら、いいだろにの  
オ」と、いいました。

「そりゃ、道ばたにあったら、みんながたすかる」  
と、いって、お母さんは、あの道の暑い日ざかりに通  
る人びとをかぞえあげました。大野の町から車をひい  
てくる油売り、半田の町から大野の町へ通る飛脚屋、  
村から半田の町へでかけてゆく羅宇屋の富さん、その  
ほかたくさんの荷馬車ひき、牛車ひき、人力ひき、遍  
路さん、乞食、学校生徒などをかぞえあげました。こ

れらの人の、どがちようどしんだのむねあたりでか  
わかぬわけにはいきません。

「だで、道のわきに井戸があったら、どんなにかみん  
ながたすかる」

と、お母さんは話をむすびました。

三十円くらいで、その井戸がほれるということ、  
海蔵さんが話しました。

「うちのよう貧乏人にや、三十円といや大した金で  
眼がまうが、利助さんとこのような成金にとつちや、  
三十円ばかりはなんでもあるまい」

と、お母さんはいいました。海蔵さんは、せんだって  
利助さんが、山林でたいそうなお金を儲けたそうなど  
きいたことをおもいだしました。

ひと風呂あびてから、海蔵さんは牛車ひきの利助さ  
んの家へ出かけました。

うしろ山で、ほオほオと梟が鳴いていて、崖の上  
の仁左工門さんの家では、念仏講があるのか、障子に

あかりがさし、木魚むくぎよの音が、崖かきの下のみちまでこぼれていました。もう夜でありました。いってみると、働きの利助さんは、まだ牛小屋の中のくらやみで、ごそそと何かしていました。

「えらい精せいが出るのオ」

と、海蔵さんがいいました。

「なに、あれから二へん半田まで通かよつてのオ、ちよつとおくれただてや」

といいながら、牛の腹はらの下をくぐって利助さんが出てきました。

ふたりが縁えんばなに腰こしをかけると、海蔵さんが、「なに、きょうのしんたのむねのことだかのオ」

と、話しはじめました。

「あの道ばたに井戸を一つほつたら、みんながたすかると思うがのオ」

と、海蔵さんがもちかけました。

「そりゃ、たすかるのオ」

と、利助さんがうけました。

「牛が椿の葉をくちまうまで知らんどったのは、清水が道から遠すぎるからだのオ」

「そりゃ、そうだのオ」

「三十円ありや、あそこに井戸がひとつほれるだかのオ」

「ほオ、三十円のオ」

「ああ、三十円ありやええだけな」

「三十円ありやのオ」

こんなふうにいっていても、いっこう利助さんが、こちらの心をくみとってくれないので、海蔵さんは、はつきりいってみました。

「それだけ、利助さ、ふんぱつしてくれないかエ。きけば、お前、だいぶ山林でもうかったそうだが」

利助さんは、いままで調子よくしゃべっていましたが、きゆうにだまってしまいました。そして、じぶんのほっぺたをつねっていました。

「どうだエ、利助さ」

と、海蔵さんは、しばらくして答えをうながしました。

それでも利助さんは、岩のようにだまっています。どうやら、こんな話は利助さんにはおもしろくなさそうでした。

「三十円で、できるげながのオ」

と、また海蔵さんがいいました。

「その三十円をどうしておれが出すのかエ。おれだけがその水をのむなら話がわかるが、ほかのもんもみんなのむ井戸に、どうしておれが金をだすのか、そこがおれにはよくのみこめんがのオ」

と、やがて利助さんはいいました。

海蔵さんは、人びとのためだということを、いろいろとききましたが、どうしても利助さんには「のみこめ」ませんでした。しまいには利助さんは、もうこんな話はいやだというように、

「おほか、めしのしたくしろよ。おれ、腹はらがへつとるで」

と、家の中へむかってどなりました。

海蔵さんは腰こしをあげました。利助さんが、夜おそくまでせつせと働くのは、じぶんだけのためだということがよくわかったのです。

ひとり夜みちを歩きながら、海蔵さんは思いました。——こりや、ひとにたよっていちゃだめだ、じぶんの力でしなけりや、と。

### 三

旅の人や、町へゆく人は、しんたのむねの下の椿の木に、賽銭箱さいせんばこのようなものがつるされてあるのをみました。それには札ふだがついていて、こう書いてありました。

「ここに井戸をほって旅の人にのんでもらおうと思  
います。志ちのある方は一銭せんでも五厘りんでも喜捨きしやして  
ください」

これは海蔵さんのしわざでありました。それがしょ  
うごに、それから五六日のち、海蔵さんは、椿の木に  
向かいあった崖の上にはらばいになって、えにしだの  
下から首ったまだけ出し、人びとの喜捨のしようをみ  
ていました。

やがて半田の町の方からおばあさんがひとり、乳母うば  
車くるまをおしてきました。花を売って帰るところでしょ  
う。おばあさんは箱に目をとめて、しばらく札をなが  
めていました。しかし、おばあさんは字を読んだので  
はなかつたのです。なぜならこんなひとりごとをいい  
ました。

「地蔵さんも何も無いのに、なんでこんなとこに賽銭  
箱があるのじゃろ」そしておばあさんはいってしま  
いました。

海蔵さんは、右手にのせていたあごを、左手にのせ  
かえました。

こんどは村の方から、しりはしよりした、がにまた  
のおじいさんがやってきました。「庄平しやうへいさんのじい  
さんだ。あのじいさんはむかしの人間でも、字が読め  
るはずだ」と、海蔵さんはつぶやきました。

おじいさんは箱に眼をとめました。そして「なに  
に」といいながら、腰こしをのばして札を読みはじめまし  
た。読んでしまうと、「なアるほど、ふふうん、なアる  
ほど」と、ひどく感心しました。そして、ふところの  
中をさぐりだしたので、これは喜捨してくれるなと思  
っている、とり出したのは古くさいたばこ入れでし  
た。おじいさんは椿の根もとでいっぶくすっていい  
てしまいました。

海蔵さんは起きあがって、椿の木の方へすべりおり  
ました。



箱を手にとって、ふってみました。なんの手ごたえもないのでした。

がっかりして海蔵さんは、ふうツと、といきをもらしました。

「けつきよく、ひとはたよりにならんとわかった。いよいよこうなったら、おれひとりの力でやりとげるのだ」といいながら、海蔵さんは、しんたのむねをのぼっていきました。

#### 四

つぎの日、大野の町へ客を送ってきた海蔵さんが、村の茶店にはいつていきました。そこは、村の人力ひきたちが一仕事してくると、つぎのお客を待ちながら、やすんでいる場所になっていたのです。その日も、

海蔵さんよりさきに三人の人力ひきが、茶店の中にやすんでいました。

店にはいつてきた海蔵さんは、いつものように、駄菓子箱のならんだ台のうしろにあおむけにねころがってうっかり油菓子をひとつつまんでしまいました。人力ひきたちは、お客を待っているあいだ、することがないので、つい、駄菓子箱のふたをあけて、油菓子や、げんこつや、ぺこしゃんという飴や、やきするめや餡つぼなどをつまむのが癖になっていました。海蔵さんもまたそうでした。

しかし海蔵さんは、いま、つまんだ油菓子をまたもとの箱に入れてしまいました。

みていた仲間の源さんが

「どうしただや、海蔵さ。あの油菓子は鼠の小便でもかかっておるだかや」といいました。

海蔵さんは顔をあかくしながら、

「ううん、そういうわけじゃねえけれど、きょうはあまりたべたくないだがや」

と、答えました。

「へへエ。いっこう顔色もわるくないようだが、それでどこかわるいなかや」

と、源さんがいいました。

しばらくして源さんは、ガラスつばから金平糖こんぺいとうを一つかみとり出すと、そのうちの一つをぽオいと上に投げあげ、口ではくりと受けとめました。そして、

「どうだや、海蔵さ。これをやらんかや」

と、いきました。海蔵さんは、昨日きのうまではよく源さんと、それをやったものでした。ふたりで競争きょうそうをやつて、受けそになった数のすくないものが、相手に別の菓子を買わせたりしたものでした。

そして海蔵さんは、この芸当ではほかのどの人力ひきにも負けませんでした。

しかし、きょうは海蔵さんはいいました。

「朝から奥歯おくばがやめやがってな、甘いものはたべられんのだてや」

「そうかや、せいじゃ、由よしさ、やろう」

と、いって、源さんは由さんと、それをはじめました。

ふたりは色とりどりの金平糖こんぺいとうを、天井てんじょうに向かって投げあげてはそれを口でとめようとしましたが、うまく口にはいるときもあれば、鼻はなにあたったり、たばこぼんの灰はいの中なかにはいたりすることもありました。

海蔵さんは、じぶんがするのなら、ひとつもそらしはしないのだがなあ、と思おもいながらみていました。あまり源さんと由さんが落おとしてばかりいると、「よし、おれがひとつやってみせてやるかい」といって出たくなるのでしたが、それをがまんしていました。これはたいへんつらいことでありました。

はやく、お客おきがくればいいのになあ、と海蔵さんは眼まなこをほそめて明るあい道みちの方かたをみていました。しかしお

客よりさきに、茶店のおかみさんが、やきたてのほかほかの大餡巻おおあんまきをつくってあらわれました。

人力ひきたちは、大よろこびで、一本ずつとりました。海蔵さんもがまんできなくなって、手がすこしうごきだしましたが、やっとのことでおさえました。

「海蔵さ、どうしたじゃ。一銭もつかわんで、ごっそりためておいて、大きな倉でもたてるつもりかや」と、源さんがいいました。

海蔵さんは苦しそうに笑って、外へ出てゆきました。そして、溝みぞのふちで、かやつり草をおって、蛙かえるをつっていました。

海蔵さんの胸むねの中うちには、げんこつのようにかたい決心があったのです。いままでお菓子につかったお金を、これからは使わずにためておいて、しんたのむねの下に、人びとのための井戸をほろうというのであります。

海蔵さんは、腹はらも歯もいたくありませんでした。のどから手が出るほど、お菓子はたべたかったのです。しかし、井戸をつくるために、いままでの習慣しゅっかんをあらためたのであります。

## 五

それから二年たちました。

牛が葉をたべてしまった椿にも、花が三つ四つさいたじぶんのある日、海蔵さんは半田の町に住んでいる地主の家へやっていきました。

海蔵さんは、もう二ヶ月ほどまえから、たびたびこの家へきたのでした。井戸をほるお金はだいたいできたのですが、いざとなって地主が、そこに井戸をほることをしようちしてくれないので、何度もたのみにき

たのでした。その地主というのは、牛を椿につないだ利助さんを、さんざんしかったあの老人だったのです。

海蔵さんが門をはいったとき、家の中から、ひえっというひどいしゃっくりの音がきこえてきました。

たずねてみると、一昨日いつせきじつから地主の老人は、しゃっくりがとまらないので、すっかり体からだがよわって、床とこについているということでした。それで、海蔵さんはお見舞みまいに枕もとまできました。

老人は、ふとんを波うたせて、しゃっくりをしていました。そして、海蔵さんの顔を見ると、

「いや、何度お前がたのみにきても、わしは井戸をほらせん。しゃっくりがもうあと一日つづくと、わしが死ぬそうだが、死んでもそいつはゆるさぬ」

と、がんこにいいました。

海蔵さんは、こんな死にかかった人と争ってもしかたがないと思って、しゃっくりにきくおまじないは、

茶わんにはしを一本のせておいて、ひといきに水をのんでしまうことだと教えてやりました。

門を出ようとすると、老人の息子むすこさんが、海蔵さんのあとを追ってきて、

「うちの親父おやじは、がんこでしょうがないのですよ。そのうち、私の代になりますから、そしたら私があなたの井戸をほることを承知しょうちしてあげましょう」といいました。

海蔵さんは喜びました。あの様子ようすでは、もうあの老人は、あと二三日で死ぬにちがいない。そうすれば、あの息子があとをついで、井戸をほらせてくれる、これはうまいと思いました。

その夜、夕飯ゆふはんのとき、海蔵さんは年とったお母さんに、こう話しました。

「あのがんこ者の親父もんが死ねば、息子が井戸をほらせてくれるそうだがのオ。だが、ありゃ、もう二三日で死ぬからええて」

すると、お母さんはいいました。

「お前は、じぶんの仕事のことばかり考えていて、わるい心になっただな。人の死ぬのを待ちのぞんでいるのはわるいことだぞや」

海蔵さんは、とむねをつかれたような気がしました。お母さんのいうとおりだったのです。

つぎの朝早く、海蔵さんは、また地主の家へ出かけていきました。門をはいると、昨日より力のない、ひきつるようなしゅ、くりの声が聞こえてきました。だいぶ地主の体が弱ったことがわかりました。

「あんたは、またきましたね。親父はまだ生きていますよ」

と、出てきた息子さんがいいました。

「いえ、わしは、親父さんが生きておいでのうちに、ぜひおあいしたいので」

と、海蔵さんはいいました。

老人はやつれてねていました。海蔵さんは枕もとまくらに両手をつけて、

「わしは、あやまりにまいりました。昨日、わしはこれから帰るとき、息子さんから、あなたが死ぬば息子さんおにが井戸をゆるしてくれるときいて、わるい心になりました。もうじき、あなたが死ぬからいいなどと、おそろしいことを平気で思っていました。つまり、わしはじぶんの井戸のことばかり考えて、あなたの死ぬことを待ちねがうというような、鬼おににもひとしい心になりました。そこで、わしは、あやまりにまいりました。井戸のことは、もうお願いしません。またどこか、ほかの場所をさがすとします。ですから、あなたはどうぞ、死なないでください」

老人はだまってきいていました。それから長いあいだだまって海蔵さんの顔を見上げていました。

「お前さんは、感心なおひとじゃ」

と、老人はやっと口をきっていいました。

「お前さんは、心のええおひとじゃ、わしは長い生涯しんがいのじぶんの欲ばかりで、ひとのことなどちっとも思わずに生きてきたが、いまはじめてお前さんのりっぱな心にうごかされた。お前さんのような人は、いまだきめずらしい。それじゃ、あそこへ井戸をほらしてあげよう。どんな井戸でもほりなさい。もしほって水が出なかつたら、どこにでもお前さんのすきなところにほらしてあげよう。あのへんは、みな、わしの土地だから。うん、そうして、井戸をほる費用がたりなかつたら、いくらでもわしが出してあげよう。わしは明日にでも死ぬかも知れんから、このことを遺言ゆいごんしておいてあげよう」

海蔵さんは、思いがけないことばをきいて、返事のしようもありませんでした。だが、死ぬまえに、このひとりの欲よくばりの老人が、よい心になったのは、海蔵さんにもうれしいことでありました。

## 六

しんたのむねから打ちあげられて、すこしくもった空で花火がはじけたのは、春も末に近いころの昼でした。

村の方から行列が、しんたのむねをおりてきました。行列の先頭には黒い服、黒と黄の帽子ぼうしをかむった兵士がひとりいました。それが海蔵さんでありました。

しんたのむねをおりたところに、かたがわには椿の木がありました。いま花はちつて、浅緑の柔らかい若葉になっていました。もういっぽうには、崖をすこしえぐりとって、そこに新しい井戸ができていました。そこまでくると、行列がとまってしまいました。先頭の海蔵さんがとまったからです。学校かえりの小さい子どもがふたり、井戸から水をくんで、のどをなら

しながら、美しい水をのんでいました。海蔵さんは、それをにこにこしながらみていました。

「おれも、いっぱい飲んでいこうか」

子どもたちがすむと、海蔵さんはそういって、井戸のところへいきました。

中をのぞくと、新しい井戸に、新しい清水がゆたかにわいていました。ちょうど、そのように、海蔵さんの心の中にも、よろこびがわいていました。

海蔵さんは、くんでうまそうにのみました。

「わしはもう、思いのこすことはないがや。こんな小さな仕事だが、人のためになることをのこすことができたからのオ」

と、海蔵さんはだれでも、とっつかまえていたい気持ちでした。しかし、そんなことはいわないで、ただにこにこしながら、町の方へ坂をのぼっていきました。

日本とロシアが、海の向こうでたたかいはじめていました。海蔵さんは海をわたって、そのたたかいの中にはいつていくのでありました。

## 七

ついに海蔵さんは、帰ってきませんでした。勇ましにちろせんそうく日露戦争の花とちったのです。しかし、海蔵さんのこした仕事は、いまでも生きています。椿の木かげに清水はいまもこんこんとわき、道につかれた人びとは、のどをうるおして元気をとりもどし、また道をすすんでいくのであります。

### 「牛をつないだ樁の木」

※『新装版 新美南吉童話集 3 花のき村と盗人たち』  
(2012年12月1日、大日本図書株式会社)の「牛をつないだ樁の木」をもとに一部、漢字表示とルビを編集しました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、  
新美南吉記念館までご連絡ください。(TEL：0569-26-4888)